

あんのんえんこう

宰相山 角屋

圓光寺だより

〒五四三・〇〇一三 大阪府大阪市天王寺区玉造本町一三・五
電話番号、FAX 〇六・六七六一・八二九三

令和 四年 春号 No.九十六
寺報 あんのんえんこう
発行 圓光寺ごほう志会
執筆者 足利誠正、正往

「なもあみだぶつ」とは

浄土真宗の根本章典の一つに大無量寿教があります。内容は、一人の国王が世自在王仏（世の中にありながら真に自在な王）説法を聞いて、深く喜び王位も捨て、悟りを求める心をおこし出家修行者となり法蔵菩薩と名乗った。

世自在王仏のもとで法蔵菩薩は、すべての生きとし生けるもの救おうと四十八の願いと行を選び取り、修行に励んだ。そしてさとりを開き仏となられた。その名を阿弥陀仏という。無限の命、光明の如来。時間、空間を越えてあらゆる命を救うという名である。私たちを西方浄土に救ってくれるのが阿弥陀仏（如来）です。

これを現代的に解釈すれば夕日の落ちる西にある空間（スペース）としての極楽世界ではなく、電磁場の（場）のようにとらえるのが理解しやすいのではないだろうか。

阿弥陀如来と浄土を「世の中の仕組み、宇宙の法則」と表現できます。親鸞の名著「教行信証」、「末灯章」の中で

「真実の仏は、目にも、色もなく、形もましまさず、一如であり真如である」

真如、一如について、それは真如縁起という考え方で存在の根源はすべてが一つであり、それが縁起によって個々の形をとっているということとす。真如が方向性をもって、苦しむものを智慧の世界に導き、さとりに導こうとする法則を「真如より救うために来る法則」ということで「如来」といえます。

「涅槃経」から引用して、
光明とはいつまでも衰えないものである。いつまでも衰えないものを如来という。
さとりはとらわれを離れた無という。とらわれを離れた無はすなわちさとりである。さとりはすなわち如来である。如来はすなわちとらわれを離れた無である。これははからいを離れたあるがままのはたらきである。

たった一つの本質を、あらゆる言葉、表現で伝えようとしています。どう感じられますか。

一方、私たちに限定された五感で感じる世界

では、真つ赤な真ん丸の夕日が落ちる情景は死後の世界をイメージさせ、西に阿弥陀如来の極楽浄土があるというのは昔の人には安心感を与えたでしょう。今の人には世界の原理、法則といったほうが納得しやすく、親鸞自身はその時代で抽象的な理解をできた人でした。

抽象理解ができない人には阿弥陀仏という物語ストーリーで救われる。どれが正しいかではなく、お釈迦様と同じように目の前の人が「どうすれば救われるか」で、対機説法、矛盾していてもいいのです。

「なもあみだぶつ、なまんだぶ」と称名することとは、時空を超えたこの世の法則性がすべての命、次元を超えた場に満たされていることを知り、私は大無量寿経の法蔵菩薩のように生きとし生けるものを救おうという願行に励みます。そして今いるこの現生の（場）が浄土となり悟りを開き、私以外の周りも浄土にしますと解釈できます。死んだ後の来世の話でなく、今この場の現世での行というところが重要だと思います。

仏法第一

不思議をば

不思議と信ずるほかに

信心はなし

五月の一言

五月の伝道板はこのようにしました。何度か読んで味わってほしいのですがいかがですか。仏法という言葉と信心という言葉がキーワードのようにです。仏法、信心とも深い内容があります。でも読んで味わうとなるほどとわかってくるようです。

とくに仏法について説明してあるのを過去の資料から次に紹介します。

世俗の論理の行き詰まることを教えるのが仏法だということです。世俗に優先する仏法という項目も立てています。

人間として生きていく上には世俗の論理を無視できないことである。しかし世俗の論理の行き詰まることを教えるのが仏法なのである。

仏法はすべてのもののうえにつながり通ずるものである。

仏法の生きるものであるなら世俗の論理よりも仏法が優先するはず。これが仏法者としての願いとなつて生きてくるのである。

順序も義理も大切なことだが、それをのりこえて自由に溶け合う道が仏法であり、自分自身をさらけ出すことによって十分に話し合いのできるのが仏法者である。

写経の会のご案内

五月二十八日 午後二時から四時まで

書いて味わう正信偈

ご協力をお願い

今回、圓光寺総代、吉田道弘様、山本公土様、中川元夫様との相談の上、圓光寺仮本堂内部の再建計画が決まりましたので、後日詳細を書いた封筒を送らせてもらいますのでご協力お願いいたします。

玉造に移転して半世紀近くなり、圓光寺の境内に新たに本堂を建設する計画でしたが、先代からの寄付協力の仕方の経験もなく、時間だ

けが過ぎ今に至ってしまいました。納骨堂の整備、古い蔵の解体は圓光寺の今までの収益、お布施から行わせていただきました。

そして最低限、本堂周りは荘厳しようと思いい今回のことに至っています。当時とは違い、今の境内に新たに本堂を再建するとなると莫大な費用がかかりますので、今の仮本堂を本本堂とすることがいいのではないかと思っております。

何か良い提案などあればご教授ください。仏教では喜捨とも言います。生活に無理のない範囲で出していただけるとご協力をお願いいたします。

花まつり

四月八日、お釈迦様のお誕生日です。甘茶をかけてお祝いしました。

